

Title	文学にみるビルマ青年労働者像 : マウンターヤ作 「路上に立ちてむせび泣く」の場合
Author(s)	南田, みどり
Citation	大阪外国語大学学報. 57 p.13-p.24
Issue Date	1982-03-10
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80893
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

文学に見るビルマ青年労働者像 —マウンターヤ作「路上に立ちてむせび泣く」の場合—

南 田 みどり

The Characterization of A Burmese Young Worker through 'Stand and Weep on the Road' by Maung Tha Ya

Midori MINAMIDA

The idea that the literature is not for the literature's sake but for the liberation of the people appeared after World War 2 in Burma. How is this idea succeeded by recent Burmese novelists? Here I'd like to search it through Maung Tha Ya's novel "Stand and Weep on the Road" written in 1969. He is said to change his way of writing and became the novelist of critical realism from that of love stories. As a novel of critical realism this was written with his desperate efforts and won national literature prize in 1970.

He wrote a great variety of people in his novels and showed variety of troubles of their daily life. But he doesn't show that way of the solution of the trouble of such people. Whether it is necessary to show the way through novels in Burma today should be examined in future as another problem.

The Content of this thesis is as follows.

1. The introduction, short biography of Maung ThaYa and the motive of this novel.
2. The characterization of hero of this novel.
3. The streams of Burmese literature after World War 2, the problems of this novel and the conclusion.

1

労働者農民等被抑圧階級に奉仕する文学を歓迎する現代ビルマ文芸界の傾向は、第二次大戦直後のダゴンターヤが提唱した新文学⁽¹⁾、テインペーミンが提唱した人民文学⁽²⁾等に端を発する。さらに、1949年のテインペーミンによる、作家はまだ人民から遊離しており、おそれず人民の中へ入るべきだという指摘は、⁽³⁾ なお今日的意義を持つと言えよう。

当のテインペーミンも、その後それらを実践することに成功しなかった。彼は、政治活動と創作の狭間に揺れつつ、創作から離れ、軍事政権登場後、その「社会主義」化路線に夢を託して、政治を捨て、再度創作に挑んだ。だがかつての彼の小説の特徴である激動社会と個人とのかかわりの追求は描けず、その上「人民から遊離」していた為題材にも事欠き、身辺雑記的私小説に埋没するうちに、不遇の晩年を送った。その背後には、軍事政権の厳しい言論出版統制もあったという。

新文学や人民文学の影響下に育ち、現在活躍中のすべての作家も、外的規制のもとで閉塞状況にあるのか。「今日、人民の生活を本当に書いている者は、極めて希少である。書きたいが、書けるのだが、書く技量があるのだが書かない者もいれば、書くべきことがつかめない者もいる。書く勇気のない者もいる。書く技量がない者もいる。」⁽⁴⁾という評論家マウンズニーの指摘は、現代の多難な一面をしるばせる。だが、かつての巨匠テインペーミンが描ききれなかった現代を、したたかに描く作家は堅実に育っている。彼等が1940年代末のテインペーミンらの提起にいかにかえ、テインペーミンをいかに乗り越えようとしているかを追求することも、ひとつの課題である。ここでは、それらの作家の1人で、「現代数少ない批判的リアリズム小説を書く1人」⁽⁵⁾と言われるマウンターヤ（1931—）の長編小説「路上に立ちてむせび泣く」（1969）の主人公である青年労働者像を通して、現代ビルマ文学の課題を考えたい。

マウンターヤ、本名マウンティンルゥインは、1931年10月23日、マンガレイに生まれた。地元の高校を卒業し、1947年から48年にかけてマンガレイ大学に、1951年から52年にかけてラングーン大学に学んだ。1951年より、ミンルゥインの筆名で、雑誌「新文学」「人民ジャーナル」「シュマワ」に投稿して筆を研ぐ一方、学生運動にもかかわった。1952年から53年にかけて、マンガレイ大学に戻って学生運動の指導で勇名を馳せ、1953年10月、大学理事会の休暇短縮案に反対するラングーン大学学生の闘争に呼応して、治安維持法違反で逮捕された。服役後、大学に復帰せずラングーンへ下り、「シュマワ」誌編集者を務めつつ作家への道をめざした。1955年6月、マウンターヤの筆名で書いた短編小説「早く散った葉柄」が「シュマワ」に掲載され、作家としてデビューした。以後彼は、古典作品から雅語難語を引用駆使し、凝った文体で青年層をとらえ、恋愛小説作家として人気を博し、「彼の以前に有名なティンデーやタンスウエすら追い越し有名になった。」⁽⁶⁾という。

だが彼はその座に甘んじず、やがてかつての学生運動仲間も加わるマンガレイの上ビルマ作家グループに交わる。それが契起であったかは論議の余地があるが、1964年頃より彼は転身をはかっ

ている。「一生に、二種の人生を生きることのできる者は少ない。とりわけ、気取り屋の恋愛小説家の人生が、リアリズム小説家へ変わるのは、なおさら困難であつたろう。」⁽⁷⁾とマウンズニーの指摘にあるように、作家の中でも希少な例であろう。しかし、恋愛小説作家時代を、マウンターヤは清算主義的にとらえていない。彼は、「人寄せのためわざわざ」⁽⁸⁾流麗な文体を試みた。それは彼に、技法的修練の場と共に、読者層開拓の機をも与えていたのである。

「路上に立ちてむせび泣く」でさらに脱皮をはかるため、マウンターヤは内容形式共に新しい試みを用い、先輩作家テットーに序文を依頼する際「私の作風が以前とは違うということは、この小説を読めばわかりでしょう。」⁽⁹⁾と自信を示した。「彼の作風が変化したことは明白にわかる。若さから成熟へとでも言おうか。以前、マウンターヤはことばをこねまわしていたい風であつた。今は、ことばを卒直に、上品にしておきたいらしい。今は、もっと内容に依拠しているようである。彼も経験が豊富になってきているのであろう。」⁽¹⁰⁾と、その変化にテットーは好意的で、この作品を「現代を映す鏡」⁽¹¹⁾に例える。タクシー運転手とその周辺をリアルに描き、タクシー界を生き生きと示すからである。

マウンターヤは作品の目的を、「タクシー労働者達の生活を理解することにすぎない。」⁽¹²⁾とごく淡々と語るが、取材に投じられたエネルギーは並みはずれたものがあつた。「管理職レベルでだけの取材が正確で十分だと私は考えなかった。従つて、下積み労働者集団の中に降り立ち、自らの生活をも埋め取材することにより、正確で十分となるよう私は努めたかった。」⁽¹³⁾1968年7月8月、彼は数名の上司以外には身分を伏せ、官吏として陸運局に勤務した。貨物運輸部、旅客運輸部を経て、新入タクシー運転手として四輪タクシー部に入り、1週間訓練を受けた後、2週間乗務した。作品冒頭の彼の序文によれば、最初の1週間は、食事する間も惜しんで走行したが、8時間以内に180マイル以上走行し45チャット⁽¹⁴⁾以上を売り上げるというノルマに達しなかった。取材が進行しないことに業を煮やして、彼は事情を知る上司から最も収入の多いタクシーの番号を教わり、ひそかに尾行して仕事の要領をつかんだ。不規則な食事と睡眠や、上半身が風のため冷え、下半身がモーターの熱気にはてる等の激務に耐えかねて、2週間後彼は病床に伏した。肉体的苦痛だけではない。乗客とのかかわりのむずかしさが、人見知りの激しいこの作家の精神をいためつけた。国民全般に浸透する運転手蔑視を彼は痛く感じた。身心両面の苦痛の中から生まれたこの作品は、彼にとって二重の意味で銘記すべきものとなった。第一に彼を作家として脱皮させ、第二に1970年度民族文学賞長編小説部門受賞の榮譽をかちとつたのであるから。

2

317ページ、31章からなる「路上に立ちてむせび泣く」の冒頭は、雨季のラングーンの夜明け、雨あがりの路上、給料日明けで財布は重く、久しぶりに恋人と落ち合えるので心は軽く、期待に満ちてタクシー基地へむかう運転手ソウチャーの姿である。作品の最後は、同じ日の深夜、雨の路上、傘もなく涙と汗と雨水にまみれ、あてもなくたたずむソウチャーの姿である。早朝から深夜迄、時間の流れに沿ったソウチャーの生活を縦糸に、ソウチャーの体験から生じた連想、回想

等意識の流れを横糸に、マウンターヤはタクシー労働者の全体像に迫った。

作品の特徴の1つは、作者の貴重な体験をもとに、タクシー労働者の仕事内容や、日々遭遇する事件が、克明、詳細に網羅されていることである。それらを、ソウチャーの1日に収めるには、多すぎて不自然となる。従って回想部分に、ソウチャーもしくはその同僚の体験として織り込まれている。運転手だけの責任においてなされる仕事には、厳重な車輛点検、朝礼、給油などがあるが、いったん基地を出て乗客と接し出すと仕事は複雑化する。ノルマ料金獲得法、チップ獲得法、国有財産たる車輛破損時の責任の所在、乗車拒否とその告発投書、免許証紛失への厳罰、空車のままメーターを下げて走行する問題、一方通行が多く遠まわりせざるを得ない下町、近道を走行して客に誤解され告訴された事件、交通事故と罰金、路上の故障と修理工の問題、私営タクシーとの相克等、実際運転手を務めた者こそ知りうる事情が、各所に挿入される。この作品が、「タクシー部に関する長論文」⁽¹⁵⁾とも呼ばれる所以である。

ソウチャーの1日は、時の流れから以下のように分けられる。(1)1-6章。早朝。基地を出発し、恋人キンマと落ち合う。(2)7-16章。朝から午後。ラングーン全域を走行。(3)17-21章。午後から夕方。基地で盗みの嫌疑による訊問の後、人違いで釈放。(4)22-25章。夕方から夜。キンマの食堂を手伝い、食事と歓談。(5)26-31章。夜から深夜。帰宅後、姉夫婦と衝突して家を出る。

前述の運転手の仕事は(2)の部分を中心に盛り込まれ、体験に対する作者の心情がソウチャーの意見の中に表明される。しかしソウチャーは、作者の分身ではなく創造されたキャラクターである。小説らしく起伏を与えるために、(3)(4)(5)の各部分にソウチャーの身にふりかかる出来事を配して、ソウチャーの内面描写を展開させる。

20代半ば、もう妻子を持つておかしくない年頃であるが、ソウチャーは姉夫婦の家の居候である。酒、煙草はたしなまず、主な支出は外食費だけで、当面生活にひどく困るわけではない。同僚の1人が妻と開いているような食堂を、キンマと共に持つのが彼の夢である。その店は感じ良く、女主人がすべての客の好みを心得、茶の入れ方迄ゆき届く。神経質できれいだ好きなソウチャーに、いつも熱い菓子をよりわけてくれる。ソウチャーは、キンマを彼女のような女性にしたい。美しく頭の良いキンマは、病弱な母を静養のためメイティラの叔父のもとに残し、2年前からラングーンに出て叔母の食堂を手伝っている。いずれ店を持ち、母をひきとりたい。そのため、ソウチャーの金遣いの荒さが不満である。独身の気楽さから彼は、生活に追われる世帯持ちの同僚に簡単に金を貸すので評判がいい。キンマが貯金をすすめても、金より友情が大事と耳を貸さない。2人が店を持つ経済的保障はなく、2人の仲はまだ秘密で精神的な支援者がいないのであるから、前途は明るくない。

キンマはソウチャーの無味乾燥な過酷な労働の中で、唯一の安らぎである。公然と交際できない2人の楽しみが、5日に1度のソウチャーの朝番である。朝市で買い出しをすませたキンマをソウチャーのタクシーが拾い、茶店に立ち寄ってから店に送り届ける。その日は、公僕としての自覚を促す所長の訓辞も、ソウチャーの耳に入らない。自覚や誇り以上に、キンマとの愛が重要だ。

だが彼は、キンマに心底ほれ込んでいるのに、キンマを前にすると矛盾した言動をとってしまう。ある時は大人気なくふるまう。時間に遅れたソッチョーにキンマが怒ったふりをして口をきかないと、真に受けて腹をたてる。単にキンマの甘えにすぎないことに、気付かない。ある時は卒直に話せずくよくよする。キンマがソッチョーを、見知らぬ茶店にいざなうと、何故彼女がその店を知っているのか、以前に誰と行ったのかと気をもむが、面と向かって問いたす勇氣もない。年下のキンマの方が、はるかに大人で、叔母の店ではソッチョーに他人行儀に接するなど、感情の抑制に長ける。ソッチョーを取り巻く人物として、他に、キンマの叔母夫婦、従姉妹、ソッチョーの姉夫婦、職場の同僚、上司、乗客達等かなりの人数が登場するが、キンマを除いていずれも詳しい描写は少なく、ソッチョーとのかかわりも浅い。

真面目で人が良いが、神経質で気が小さく、子供っぽい面を持つソッチョーは、運転手として別の一面を示す。彼は、毎月ノルマ以上の収入をあげ、特に大きなトラブルを起こさず、平均以上の腕を持つ。3年間の運転手生活で、彼のあらたな内面が形成されていった。第1にそれは、乗客とのかかわりの中で、得られたものである。運転手として彼は、多くの人生の断面を垣間見、客の性格を観察し、客に対して冷めた厳しい眼を持つようになった。彼は乗客の多くに、国民としての自覚のないことが嘆かわしい。朝1番に高級住宅街で拾った着飾った女達に対しては、おしゃれと同程度に社会にも目を向けてほしいと願う。いたずら好きな子供連れの家族には、国有財産たる車を傷つけるなど、遠慮なく説教する。彼は、客の多くが抜け目なくずると思え、客から釣銭をチップとしてせしめるには嘘も方便として使う。身なりから推して、金払いがよさそうな客には、買い置きの外国煙草をもらい物だと偽って与え、6人の子持ちで生活が苦しいと出まかせの身の上話で同情を買おうとする。客がきっちり代金を払うと、落胆のあまり立腹する。客の多くから、彼は運転手蔑視を感じる。運転手と話すのも汚らわしいとばかりに、寝たふりをする客には、作り話の入る余地もない。車を傷つけても、弁償せず逃亡する客もいる。強盗や殺人に及ぶ客もいる。彼は客に対して身構えずにはいられない。たとえ客の不幸を目にしても、彼には何ひとつできない。その日は、売春婦である女子高校生、その客である地方役人とその友人、女売春業者を交互に乗せた。金さえもらえばよいと思う反面、客には怒りを、娘には痛ましさを感じる。娘を送る途中、親しく語らって心のふれあいを感じるが、しょせんゆきずりの客である。彼は様々な人生をみつめながら、車をころがす他すべもない。客と運転手は、隣り合って座り、共に同じ方向をみつめて走るが、相容れない。客は運転手の苦勞を知ろうとはしないし、運転手は客の苦しみを知ったところで何もできない。客の蔑視、客への不信、自らの非力の自覚は、彼を達観へと追いやる。

運転手生活が彼に与えた影響は、第2に陸運局タクシー部労働者という意識の中で獲得された。運転手になって、彼は非常に耳ざとくなった。タクシーを呼ぶ声を無視すると、乗車拒否として告発されるため、意志にかかわらず、運転手として条件反射するよう習慣づけられたのである。彼は、権威には弱い。相手に非のある事故でも、裁判では運転手に不利である。彼も、罰金を払っ

たことがある。納得できないが、裁判所にははむかえないとあきらめが先に立つ。タクシー部という集団への帰属意識は強い。乗務が終っても、町を走る同僚の車を目で追ひ、故障車に出会うと、他人事ながら気になる。しかし、自分が直接かわからないことには無関心を装う。同じ陸運局でも、旅客輸送部に属するバスの車掌が、切符の料金をごまかすのを目撃しても、人それぞれ事情があるのだと見過ごす。1人きりで車を走らせる中で、彼は否応なく心の中に沈み込む。彼の気分は変わりやすい。乗客のあたりはずれ、機械の調子、天候、交通事情などで感情は左右される。乗客に立腹していても、次の瞬間信号が青に変わると怒りは失せるといった調子である。怒りや悲しみは、表面的には失せても、内向し、発散の場もなく解決のすべもなく、無力感が彼を支配する。しかし、彼の反逆精神は、眠っているわけではない。それは一度だけ、ラングーン駅における私営タクシーとの乗客争奪戦で目覚めた。国営タクシーが乗車拒否できないという規定を利用して、私営タクシー経営者は、配下に旅客を装わせ、駅前で国営タクシーを拾わせて短距離を走らせ、国営タクシーを追放した後長距離客を獲得する。ソウチャーはじめ6人の運転手は、敢えてこれに乗車拒否で挑み、告訴され、法廷で堂々と意見を述べた。意見は聞き入れられず、彼等は罰金を支払った。敗北承知の闘いは、今もソウチャーの誇りであった。

作品の前半で、ソウチャーの生活と意見から、運転手の労働が具体的に示された後、(3)の部分で運転手の社会的地位の低さ惨めさを象徴する事件が描かれる。気持ちのよい客も悪い客もあり、交通事故もあり、その日、昼過ぎ迄は、いつもと変わりがなかった。ノルマ達成に手間取り、空腹のまま1時間遅れて基地に戻ったソウチャーを待っていたのは、彼の車に金品の入ったバッグを忘れたという女と、その夫の少佐、そして刑事である。女が乗った筈の時刻、ソウチャーは売春婦を迎えに、空車でメーターを下げ走っていた。女は頑強に、ソウチャーの車のナンバーを主張し、ソウチャーは形勢不利となって、彼の家は搜索される。やがて、ソウチャーとは似ても似つかぬ同僚がバッグを届け、疑いは晴れる。女は運転手の顔など見ていなかったし、車のナンバーも全く記憶違いであった。ソウチャーへの人権侵害は、「正直な運転手の美談」へとすりかえられる。バッグを届けた運転手は抜け目なく、謝礼より名誉が欲しい、タクシー運転手がいかに親切で正直であるかを示す新聞記事を出してほしいと申し出る。少佐夫人は、ソウチャーへの謝罪も兼ね、翌朝茶話会を持つことを提案し、そこに新聞記者を招いてバッグの返還式を行なう運びとなる。ソウチャーはわりきれない。運転手でなかったら、少佐夫人の横柄さ、刑事の強引さはあり得たか。運転手は卑しいという意識が、彼等の心の奥底に存在する。ソウチャーは、ふと仕事をやめたくなるが、失業者あふれる都市で、転転は困難であるばかりか、結婚すら遠のくのは明白である。女の訴えが簡単に信じられたのは、少佐夫人という肩書きによる。要転のほとんどが軍人で占められるタクシー部に、権威主義、官僚主義が存在することは否めない。だがソウチャーは、上司に寛大であった。所長は口は悪いが、仕事熱心で労働者思いであり、少佐夫人の圧力でソウチャーを事細かに調べはしたが、本当は自分をよく理解していると、ソウチャーは思っている。帰属意識の強いソウチャーは、上司の顔をつぶす行為はできない。彼は人権侵害に怒らず、少佐夫人を

許す。そして、妻を打ち妻に謝罪を要求した少佐に好感すら持つ。「美談」の宣伝に協力し、タクシー部の評判を上げることは、部の一員であるソッチョーにも喜びである筈だった。しかし、彼の心には、何故か惨めさと悲哀が渦巻き続ける。

・(4)の部分で、彼の打ちひしがれた気分が、キンマとのかかわりで晴らされるかに見える。キンマの店に彼はいつになく長く居座り、働くキンマを見つめ、手伝う。キンマと夕食をとろうと時間つぶしをする彼に、キンマの従姉ターインが世話を焼く。彼女がソッチョーに想いを寄せているのではないかと、キンマもソッチョーも内心穏やかではない。が、敏感なターインは、2人の気持を見抜き、協力を約束する。2人の前途に光がさしたことに元氣を得てソッチョーは、ターインとキンマに今日の出来事を語る。忘れ物事件は、面白おかしく作り変えられ、ソッチョーは忘れ物を拾って届け、賞讃される英雄となっている。事実はまだソッチョーの心に生々しく残っており、その通り話せば2人の娘が心配するばかりか、ソッチョー自身が惨めになったからである。

キンマの店での語らひは、ソッチョーの傷をわずかに癒したにすぎない。(5)の部分で、作者はソッチョーの姉夫婦を登場させ、問題に転換を与える。姉は高校教師、義兄は陸運局貨物輸送部副支配人で、子供はなく、郊外のしょうやかな土地付住宅に住み、自家用車を持ち女中を雇う。知的中産階級の一員である。白昼の家宅搜索は、閑静な住宅街の好奇の対象となり、義兄のプライドを著しく傷つけたので、夫婦は名誉毀損の告訴を考えていた。ソッチョーは、上司である義兄が苦手であった。彼が権威に弱いのは軍隊時代の体験に起因する。この荒々しい集団で、上官は絶対的存在であり、ソッチョーの反骨精神は無惨に叩きのめされていた。除隊後彼は、義兄の縁故で現在の恥を得た。同居は、上官の家に住もうも同然であり、彼を畏縮させた。ソッチョーは、運転手がわりに客人の送迎を命じられ、年若い女中にさえ小馬鹿にされた。彼の足は家から遠のき、食事はキンマの店と契約し、家は眠るだけの場所となった。

疲れ傷ついて帰宅したソッチョーを思いやる優しさなどない義兄は、少佐夫人を許すソッチョーの上司の手ぬるさをなじった。ソッチョーのぼんやりした怒りの対象は、この義兄にむけられ、彼は初めて義兄に反駁した。少佐夫人は謝罪し、すべて丸くおさまった、殺人や強盗などと比べればましなのだと。自分の尊厳を傷つけられることに慣れたソッチョーのそのようなことばは、義兄をさらに怒らせた。義兄にとって、尊厳が傷つけられる事件は一度たりとも許しがたかったのだ。義兄は結婚を勧めて、災難の種であるソッチョーに暗に家を出ることを促す。陸運局に働きながら、内心でタクシー労働者を軽蔑する義兄に、ソッチョーは中産階級の知識人の傲慢さを見る。体面のみ重んじる彼等より、運転手の自分の方が人生をよく知っている。彼等は知識や学歴を持っているだけで偉くなどないということに彼は気付く。そして、昼間自分を惨めにさせたものが、義兄の本質と同種であることを知る。彼は、さらに反駁しようと燃えたつ心をおさえ、家を出る。彼が出すぎたことをすると、姉の立場がなくなるからである。

義兄との訣別は、権威に弱かった過去のソッチョーとの訣別であった。傲慢な中産階級との絆を断ち、自立への道を歩むことで、彼は昼間受けた痛手を乗り越えようとした。タクシー労働者

の苦しみの解決には、賃金や勤務時間など過酷な労働条件の改善による労働者の社会的地位の向上が必要であるが、それは、現在のビルマでは不可能であり、ソウチャーにとっても思いもつかないことであった。ともかくソウチャーは誇りを回復したが、降りしきる雨と立ちはだかる闇は、彼の多難な前途を象徴する。彼には、当面依拠すべき一夜の宿も、今後の生活上の見通しもない。キンマの叔母に事情を打ち明け宿を求めたとしても、叔母が2人の仲を許さなければ更に事態が悪くなる。強引にキンマを連れ出す自信もない。甘い逃避的な愛だけでは救いにならないことを彼は思い知る。運転手仲間も生活に追われ、泊めてくれそうな家はない。仲間どうしの妬みを恐れ、日々の収入を正直に教えない雰囲気があるほどだ。金離れがよいことで友情に囲まれていると信じていたソウチャーが、本当に困った時頼れる仲間にも恵まれない。組織化がすすみ解放されている筈の労働者に、連帯感希薄である。ソウチャーを孤独感が支配する。雨は容赦なく彼の体を打ち、誇りとは裏腹に厳しい現実が彼を不安におとし入れ、その心は誇りと不安の間を行きつ戻りつする。だがとりあえず、彼は翌朝8時からの、彼にとって何のためにもならない「忘れ物返還式」に出席しなければならない。下町のキンマの店の近く迄やって来ているが、おじけづいた彼は郊外のタクシー基地をめざす。だが深夜、車もつかまらない。路上にソウチャー1人を置きざりにして、マウンターヤは物語を閉じる。

ソウチャーのような長所短所をそなえて、きわだったところのない青年、将来への見通しもなく日々のくらしに追われる青年は、ビルマに無数に存在するであろう。マウンターヤは、彼等の一隅にスポットを当て、運転手生活の中の青年像を浮き彫りにしたのである。

3

ソウチャーのようなごく普通の人間の日常を描写する小説は、ビルマ文芸界の流れの中から必然的に生じたものである。抗日闘争から独立へ大きな激動を体験した作家達は、戦後新文学や人民文学を指標として、ほとぼしる勢いで創作に取り組んだ。内乱に揺れる1950年代は、農村改革、抗日独立闘争、青年学生運動、平和運動等が、長編小説のテーマとして好まれた。しかし、それらの中には「小説を書いていることを忘れ、政治論文を書いているのかと思うほど」⁽¹⁶⁾ 大義名分ばかりが先走った作品も多かった。一方では昔から人気を持つ恋愛小説が依然として衰えず、人物描写では前者をしのぐという問題、社会主義を標榜する若手作家がすすんでそれらを書くという問題⁽¹⁷⁾ もあった。勇ましい主張は、実質をとみなわなかった。内乱に揺れる不安定な社会も創作に制限を与えた。1960年代、軍事政権による強硬な安定を得る中で、文芸界もある種の落ち着きを得たといえよう。その後生まれた作品の特徴として、第一に、ビルマ各時代の社会的諸事件の描写、第二に、種々の階層の人生の描写、第三に、人間性の描写等が増加したといわれる。⁽¹⁸⁾ しかし、第一に含まれる作品の舞台のほとんどは、軍事政権登場以前のビルマである。ビルマの現代を、政治的社会的に正面から扱うには種々の制約があるようである。第三の特徴は、第一にも第二にも見られ、これら二点と対立する要素ではない。従って、現代圧倒的に多い作品が、第二の特徴を持つといえる。

マウンターヤの転身も、良心的な作家として、時代の流れに沿ったものであった。当時数あるリアリズム小説の中で、この作品が受賞した大きな理由は、従来の作家にない実体験の重みであろう。しかし、その体験に起因するいくつかの批判もある。第一に、体験が重すぎ、創造の部分をしのごという点である。マリカによれば、キンマの登場でも創造の貧しさはカバーできず、創造として加えられた忘れ物事件は、「運転手の正直さを見せたいという意図が強すぎ、わざと作り出したことが見え見えだ。お涙頂戴式の芝居や映画のやり口とまるっきり同じだ。」⁽¹⁹⁾そして、姉夫婦との対決は唐突だと批判する。運転手の日常を国民に周知させるという作者の執筆目的の背後には、知識人層の心にひそむ肉体労働者蔑視思想をえぐり出すという動機が存在する。従って忘れ物事件と姉夫婦との衝突はそれらを具現するものである。しかし、忘れ物事件は運転手の日常で生じることも予想されるが、姉夫婦の存在についての説明不足は、現実感を希薄にする。キンマの家庭環境が回想として説明されているにもかかわらず、主人公ソウチョーのそれはほとんどない。たった1人の姉という設定も、過去の姉とのかかわりにふれられていないので、夫と弟の板ばさみとなって揺れる心情なるものが不明瞭となる。しかし、小説の一日には山場から終結に導かれねばならない。従ってマウンターヤは、惨めなソウチョーに、中産階級との訣別による誇りを持たせて、雨の中に解き放ったのである。だがこれが、当面のソウチョーの苦しみがある程度晴らしても、根本的解決たり得ないことについては、作者は口をつぐんだままである。

第二の批判は、マリカの「マウンターヤはその世界で約3週間、貧しさと疲労に甘んじて取材中、衣食住には何の悩みもなく、仕事の苦労だけを体験した。」⁽²⁰⁾ マウンズニーの「タクシーの運転席で、前方を見ながらスピードを出して運転している者が、チラリと見る光景は、どれだけ完璧となり得ようか。」⁽²¹⁾などの指摘に集約される。ソウチョーは、家庭を持たず、生活者としての自立と責任は軽く、その苦労はほぼタクシー労働に厳定される。妻子をかかえ、生活苦にあえぎながら働く同僚達とは疲労度も異なろう。それら同僚の生活は、断片的に登場するが、筋が散慢となることをおそれてか、堀り下げはない。「短気な者、怠惰な者、軽薄な者、長時間苦痛に耐えられない者、失望しやすい者等は、この仕事に全く不向きである。」⁽²²⁾と、マウンターヤは自己の体験からタクシー労働者の適性条件を作りあげ、勤勉で我慢強い運転手ソウチョー像を創造した。しかし、生活の重みのないソウチョーをタクシー労働者全体の平均的キャラクターにとらえるには弱さが残る。ソウチョーが根無し草的であるのは、陸運局上層部の便宜を得てタクシー労働者となったマウンターヤのゆきずりにすぎない立場を反映する。「人民に近づけば、書くべき新しい事柄がたくさんみつかるであろう。」⁽²³⁾という1949年のティンペーミンの指摘は、マウンターヤの並みはずれた努力で実践された。だが、体験をそのまま描写することによる作品の限界は、克服されていない。「人民の生活問題を描写することは大変結構だ。だが、何故その問題が生じたのか、その問題にどう答えるのかの二点を入れなければ」⁽²⁴⁾というティンペーミンの指摘が、今後の課題として残るのである。

マウンターヤは、現在、身のまわりの庶民の生活実態を描くことに没頭している。「旅に出て

題材を探すような類の人物ではない。町の周辺を徘徊しながら、よい題材を狙って暮らす人物だ。普通の作家に一步先じる点は、彼には鋭い眼があることだ。」⁽²⁵⁾ マウンターヤは、ラングーン及びその周辺に取材のために入りこんでいることが多く、その鋭い眼は、常ならば見落とす事柄もつぶさにとらえる。「ひとつところに、彼がかなり長くいるとしたら注意しておくがよい。彼が戻ると何かを持ち帰る。何を持ち帰ったかは、彼の本が出ればわかる。」⁽²⁶⁾ 作品は、内容形式ともに前作とは異ったものとなる。「他の作家は問題にしない。自分自身をライバルとしているようである。」⁽²⁷⁾ これらのアウンティンの指摘は、マウンターヤの小説にける執念を物語る。

マウンターヤは、現代の小説の特徴を人物描写の側面からこうとらえる。過去には、人物にまつわる出来事を描いたものが多く、現代は、人物の性格を描いたものが多い。人物像は(1)将棋の駒の如く、動かす人の意のままにあやつられる「傀儡的人物」(2)階級階層を広く代表する「代表的人物」(3)生彩を放ち、作者の信念を具現する「理想的人物」の3種に分けられる。(1)は過去の小説に多く、現在では減少しており、(3)の登場する社会主義リアリズムの小説も、現代ビルマには希れである。現代は、まだようやくリアリズム小説が優勢となってきた時代にすぎず、(2)の人物が多く書かれるのだという。⁽²⁸⁾

現代社会を背景とした小説に、激動や英雄が登場する条件は少ない。現代必要かつ可能なことは、数多くの民衆の日常をあきらかにすることなのであろう。マウンターヤは、シュマワ誌編集部に4年、ビルマ社会主義計画党発行の計画党ニュースジャーナル編集部に3年奉職した後、数少ない専業作家として又数少ない現代の語り部として「現代のあらゆる階級、あらゆる階層」⁽²⁹⁾を網羅する勢いで、気負わずたゆまず、書き続けていく。

注

- (1) ダゴンターヤ(1919—)は、「ターヤ」誌(1946—1950)、「新文学」誌(1951—52)等を主宰して、資本家階級に奉仕する旧文学を打倒し、労働者農民のための新文学を創造することを提唱した。
- (2) テインペーミン(1914—78)は、文学を反動文学、新ブルジョア文学、写実文学、人民文学に分類し、人民文学の創造を呼びかけた。ダゴンターヤとテインペーミンの間には、若干の論争が生じた。
- (3) Thein Pe Myint: 'Yane Pyidhusapay Atwedwe Pyatthana'-Taikpwewin Samya, 1968. 6, Rangoon, p.100
- (4) Maung Sun Yii: 'Pyawbyan yinle Maung Sun Yii Lunya Kyame'-Maung Tha Ya 'Pyawbyan yinle Maung Tha Ya Lunya Kyame' 1979.12, Rangoon, p.236
- (5) 同上, p.238
- (6) 同上, p.228
- (7) 同上, p.231
- (8) 同上, p.231
- (9) Tet Toe: 'Tet Toe Ahma' p.1—Maung Tha Ya 'Mat Tat Yat Lo Lan Hma Ngo' 1969, Rangoon
- (10) 同上, p.1
- (11) 同上, p.3
- (12) Maung Tha Ya: 'Maung Tha Ya i Ahma' p.6—'Mat Tat Yat Lo Lan Hma Ngo'
- (13) 同上, p.1—2
- (14) 日本円で約1800円に相当。
- (15) Malihka: 'Myanma Wuthtu Anyun' vol.5 1973 Rangoon p.146
- (16) Kyaw Aung: 'Myanma Wuthtushe'-'Saouk Sapay' vol.1 1973 Rangoon p.46

- (17) 同上, p.47-48
- (18) U Houn Wun U Hkin Aye:'Myanma Wuthtushē'-'Myanmahmu'1975.1 Rangoon p.155-156
- (19) Malihka:前掲書p.146
- (20) 同上, p.146
- (21) Maung Sun Yii:前掲書p.233
- (22) Maung Tha Ya:'Maung Tha Ya i Ahma'p.4前掲書
- (23) Thein Pe Myint:前掲書p.101
- (24) 同上, p.88
- (25) Aung Thin:'I Saouk hnit Pattheywe Aung Thin i Amin'-Maung Tha Ya'Pyawbyan yinle Maung Tha Ya Lunya Kyame'p.218
- (26) 同上, p.219
- (27) 同上, p.221
- (28) Maung Tha Ya'Myanmar Wuthtushē hma Zathsaungmya'-Saouk Sapay vol.1 1974 Rangoon p.100-102
- (29) Maung Tha Noe:'Lunga hma Lun yaw Maung Tha Ya Pyawbyan leinme'-Maung Tha Ya'Pyawbyan yinle Maung Tha Ya Lunya Kyame'p.212

資料 マウンターヤ著書目録

(長)は長編小説,(評)は評論である。これらは最新作「私が言いかえせば言いすぎになるだろう」の巻末資料を参考にした。「マウンターヤ短編小説選集」には、1955年6月から、1962年10月迄、雑誌に発表された50編が収められる。1973年には、出版を許されなかった長編小説が1編ある。これ以外の著書や、雑誌掲載作品は、現在のところ把握できず、不十分ではあるが、参考資料とした。

1959年

- 「ミョママの伝記」(မျိုးမမ ပကာသနီ)(1959年2版, 1965年3版, 1971年4版)(長)

1963年

- 「道で見かけた1本の木」(လမ်း၌ တွေ့ခဲ့သော သစ်ပင် တပင်)(1971年2版)(長)
- 「美しい。なびきやすい。だが浮気だ。」(လှည့်လည်လှည့်လည် သို့သော် လည်သည်)(1963年2版, 1971年3版)(長)
- 「恋人は昼、自分は夜」(ချစ်သူက နေ့၊ ကိုယ်က ည)(1963年2版, 1970年3版)(長)
- 「モーシャンの高原からナンヌンカンへ」(မောမြမြင့်မှ နန်းနန်းခမ်းသို့)(評)

1964年

- 「マウンテインルウィンのマサンサンウィン」(မောင်သိန်းလွင်၏မစန်းစန်းဝင်း)(4巻に分け1965年迄出版, 1970年2版)(長)

1965年

- 「ロンジーがはずれたので追い出そう」(လမ်းကွက်၌ လွှတ်လိုက်မည်)(1969年2版, 1971年3版, 1973年4版)(長)

1966年

- 「互いに顔を見つめあい」(တယောက်မျက်နှာ တယောက် ကြည့်ကာ)(1969年2版, 1974年3版)(長)
- 「一匹のロバと二人の父子」(မြည်းတကောင်နှင့် သားအဖနှစ် ယောက်)(1970年2版)(長)

1969年

- 「泳がぬ魚、止まらぬ鳥」(မကူးသောငါး၊ မနားသောငှက်)(1971年2版, 1974年3版)(長)
- 「路上に立ちてむせび泣く」(မတ်တတ်ရပ်လို့ လမ်းမှာငို)(1970年2版, 1970年3版, 1971年4版)(長)
- 「金の箱が臭かったら帰っておいで」(ချွေစော်နံရံ ဖြန့်လိုက်ဆုံး)(1971年2版, 1974年3版)(長)
- 「そして人も連れて行った」(ပြီးတော့ လူကိုပါယူသည်)(1971年2版)(長)
- 「ピロートの靴を履き金の傘をさす」(ကတ္တီပါနိနပ်စီး၊ ရွှေစီးဆောင်း)(1970年2版)(長)

1970年

- 「人形の顔、花の顔」(အုပ်မျက်နှာ၊ ပန်းမျက်နှာ)(1973年2版)(長)
- 「その人の前に1人、その人も1人」(သူ့အရင်က တယောက်၊ သူက တယောက်)(1973年2版)(長)
- 「言いかえさなければなら言ってやりたい」(ပြန်မပြောရင် ပြောချင်တယ်)(1973年2版, 1976年3版)(長)

- 「上半分下半分」(အထက်တဝက် အောက်တဝက်)(1972年2版)(長)

1971年

- 「流れるにまかせよ、ぬぐわないで」(စီးပလေစေ မောင်မသုတ်နွဲ့)(1976年1版, 1978年2版)(長)
- 「色黒の女が勝利の旗をたてる」(အသနက်မ အောင်လံကြီးထူ)(長)
- 「蟻に刺されて我慢できるかできないか」(ကျဉ်းတုတ်ခံပုံ မခံပုံ)(長)
- 「人間の中の小説，小説の中の人間」(လူထဲကဝတ္ထု၊ ဝတ္ထုထဲကလူ)(評)

1972年

- 「母はまだ若いんですって」(အမေက ငယ်သေးတယ်တဲ့ရှင်)(1975年2版)(長)
- 「胸の動悸が少し速い」(ရင်ခုန်သံ နည်းနည်းမြန်သည်)(1972年第1巻, 1973年第2巻)(長)

1974年

- 「腰を本当についてないのにくすぐりたいと身もだえる」(ခါးတကယ်မတိုခင်က ယား တယ်လိုတို့နွဲ့)(1977年2版)(長)
- 「悪業がつきまとうから気をつけなさい」(ဝဋ်လိုက်တတ်တယ် မောင်မောင် သတိထား)(長)

1975年

- 「兎と共に逃げ，犬と共に追う」(ယုန်နှင့်အတူပြေး၊ ခွေးနှင့်အတူ လိုက်)(1976年2版)(長)
- 「マウンターヤ短編小説選集」

1976年

- 「王と結婚すれば王妃」(ရှင်ဘုရင်နဲ့ညားရင် မိဖုရား)(長)
- 「1つの洞窟にライオンが2匹」(ဂူတဝှမ်း ခြင်္သေ့နှစ်ကောင်)(長)

1977年

- 「猫に誰が鈴をつけるのか」(ကြောင်ကို ဘယ်သူရြူဆွဲပေးမလဲ)(長)
- 「泣いてはいけない，笑ってはいけない」(မငိုရဘူး၊ မရယ်ရဘူး)(長)

1979年

- 「引き算できなければ10を借る」(မနုတ်လောက်တော့တဆယ်ချေး)
- 「私が言いかえせば言いすぎになるだろう」(ပြောပြန်ရင်လဲ မောင်သာရ လွန်စရာကျမယ်)(長)

補遺 この論稿を書いて数ヵ月後，マウンターヤ自身から來信を得，次のことをつけ加えたい。

1. 作品の題名はビルマの子供の歌の一部をもじったものである。
2. 作者マウンターヤはマウンターラとも呼ばれる。ビルマ語のYの文字はYともRとも読めるのでどちらでもさしつかえない。

以上